
Love is Gone

聖斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L o v e i s G o n e

【Nコード】

N 9 1 4 0 R

【作者名】

聖斗

【あらすじ】

二人の間に、愛は無い？
——新志。

o n e (前書き)

やっってしまうよ新連載。新志です。

o n e

「ねえ、大丈夫なの？」

彼はどうせ届く位置にいないのだから、背伸びしても無駄だ。そう思い直してかかとを地面につける。視線に先に顔を真っ赤にした彼の姿。

「・・・大丈夫に見えるか？」

「・・・それくらい、あなたならどうってことないわよね」

「おい」

冗談に突っ込みを入れる程度だろう。ただきついのは確からしい。本当ならちゃんとした意味で彼に近づいて様子を見たいのだ。解毒剤の副作用だったらどうしよう、そんな不安もよぎる。

「・・・なんかあったら連絡しなさい」

傍についてあげるのは彼女の仕事だろう。私が出る幕では無い。

「つめてーなー宮野」

「・・・どうしろって言うのよ」

「俺のどこ来て」

はあ、とため息が漏れる。

彼はとことんこういうことには無神経なのだ。

「寂しいなら彼女に頼んでちょうだい」

「お前がいい」

「な・・・」

顔が熱くなる。しかし、それはすぐに冷める。

そうだ、自分は今外に居るのだ。

「鍵投げるから入ってこいよ」

そう言つて彼は2階から鍵を投げてきた。

元々私の元を狙うつもりはないのか、鍵は私より少し前にカシャン、と音を立てて落ちた。

「・・・なんなの」

部屋に上がったら彼に文句の一つでも言つてやろつ。

そう決めて鍵を拾いに門を開ける。

今夜は鍋にしようと思い、丁度仕事も休みなので買い出しに行こう
と思い立って家を出たのはいい。

玄関に鍵をかけた直後に彼からメールが来た。

『風邪引いた』と。

だからなんだ、と返信してやろうかと思ったが、あまりに可哀そう
なのでついでに様子を見てやろうと思い立ち、隣家の門のインター
フォンを押した。

しばらくして、彼が姿を現したのは玄関では無く2階の自室の窓だ
った。

「・・・悪い、動くのもだるい」

そう言っただけで冷えたピタを貼った彼が窓から顔を覗かせた。
自然と上を見上げる格好となる。

「熱はあるの？」

少し離れているので、声を大きめにする必要があった。

「38度・・・分かんねえ、もっと上がってるかも」

それを何故私に言うのだ、と思った。
解毒剤で体が元に戻った直後に3カ月ほど彼の主治医のようなことをしていたから、彼は未だにそんなつもりなのだろうか。
帰りが遅くなりそうだ、またため息がこぼれた。

「馬鹿じゃないの」

危うくもう少しで救急車沙汰になっていたところだった。
部屋に入ると遠目に見てた時には分からなかったが、汗で湿ったパジャマを着て湯気を出している彼が居た。急いで着替えを出し熱を測る。

「39度8分」

何をしたの、と問い詰める。
解毒剤を含んでまだ半年だ。
服用後1年間は最低限無茶をしてはいけないとあれだけ言ったのに。

「・・・あれだけ言ったのにね」

「でも、サッカー部だってやめたし、三食きちんと」

「・・・毎日事件で飛び回ってて無茶をしてないとも?」

「・・・すみません」

彼は鼻まで毛布をかぶって目を細めた。
大きなため息がひとつ。

「ただの風邪よ、薬置いとくから。安静にしてなさい」

「・・・病人置いてくつもりか、ひでえ」

「何が病人よ」

そう言っただけで彼を睨みつけた。
少々きついかもしれないが、これは彼のためであり、私のためなのだ。

・・・もう荷物もまとめているのだから。

「何か、言った?」

「何も」

ケホケホ、と小さく彼は何度も咳込んだ。
目を細めて彼を見る。

「何、その目」

「いいえ、別に」

じゃあね、と感情を押し殺しくるりと振り返る。

おい、と小さく声が後ろから聞こえたが、振り返るわけにはいかない。

もう視界がぼやけてる。

「・・・ちゃんと寝るのよ」

それだけ言っつて、部屋の扉を閉める。

きつと泣いてることは彼にはばれていないだろう。

分かっていたら、彼のことからひどく動揺して心配したに違いない。

彼はそういう人だ。

そこに魅かれて、そこが嫌いだった。
大嫌い。

・・・に、なれたらよかったのに。

博士には今夜の鍋は我慢してもらおう。
前も見えないくらい視界がぼやけてる。
外を歩ける状態じゃないだろう。

どんなに涙を流しても、彼の姿は流し去ることは出来ないのだ。

私はきつと、永遠に孤独な自由と向き合ったまま。

彼はその中で出逢った一人の人間でしか無いのだから。

「風邪くらいによ、私じゃ無くても・・・」

そう呟くと不思議と涙が止まった。

私は彼女になれない。

ただそれだけのこと。

さよなら、なんて言わない。

言う必要なんてない、最初から。

でも一つだけ言い忘れたことがあった。

愛してた、と。

one (後書き)

元々は短編に載せようと思って書きあげた作品が、あまりに切りが悪いので連載に。

まあ、自分の短編で切り悪いの上げたら連載作品何個分にもなってしまうんですけど↑

つーわけで数話で終わらせるつもりです。短期集中・・・？ってやつ？短期集中できるかは分かりませんが。

タイトルは初のZARDの曲からだったりします。親の影響でなんだかんだ好きなアーティストです。

だらだらと述べてしまい申し訳ありませんでした>m(_____)m<

t
w
o

これが、夢なら。

目を覚ますと、枕元に錠剤とポットが置かれていた。

ああ、そうだ、彼女だ。

よほどの高熱だったのか、自分がどうして服を着替えているのか、それすらも覚えてなかったが。

だんだんと現実味を帯びてくる。

それは数時間前。

そうだ、宮野が来てくれたんだ。

気のせいではないだろう、最近妙に避けられてる気がして、こんな状況なら来てくれるかもしれない。

淡い期待を抱いてやっこの思いでメールを送信すれば、やっぱり彼女は来てくれた。

彼女はそういう人間だ。

熱のせいで妙に視界がぼやけていたのだが、それにしても彼女は随分とつつけんどんな態度だった。

自分が何かしたのだろうか、そう思い返しても何も思い当たらない。他方で腹の立ったことを関係の無い人間にあたり散らすような性格でも無い。

目だってほとんど合わなかった。

「はあ、」

熱のせいかな、ため息が熱い。

もしかすると、熱を出していることに怒っているのかもしれない。

あれだけ無茶するなと彼女には言われていた。

もちろん、その言いつけを守ってサッカー部もやめた上、休み時間も極力外に行かずに教室で蘭たちと過ごしたし。

事件の時も、たまに逃げ出す犯人を追いかけるのは高木刑事にお願いしてるし。

それでも、ほとんど帰りが午前様なのは・・・

「それかあ」

彼女はきつと未だにA P T Xの十字架を背負っているのだ。

自分以外の唯一の生存者である自分が、気がかりと言うか、心配なのだろう。

恐らく、彼女の罪悪感は一生涯消えないだろう。

少しでもその罪悪感を拭い去るためには、やっぱり自分が常に健康でなければいけないのだ。

「怒らせちゃったなあ」

彼女には何の心配も無いとさえも約束したのに、結局彼女に頼って

しまった自分が情けない。
そう言えば最近の俺はそうだ。

以前は蘭になんでもしてもらってた、いや、蘭がなんでもしていた。戻ってからは、アイツがいないと自分が滅んでいくような気さえするのだ。

解毒剤を飲んだ一ヶ月間検査にと両親の別荘にアイツと一緒に滞在していた期間があった。

勉強を教えてもらったり、飯は三食すべて彼女が作り、ベッドこそ違ったが万が一の時のためと寝室も一緒だった。

不思議とそれが心地よかったのだ。

戻る前は一つ屋根の下に彼女と二人など息が詰まるとさえ思っていたのに。

そこに男女の感情があったかどうかなど、定かではないが。
少なくとも、その感情を全く抱かなかったと言えば嘘になる。

組織で育ったとは言え、それは彼女の大きな魅力になっているとも言える。

動じない性格、一言で綺麗としか言いようのない立ち居振る舞い。
一体何個の資格を持っているのだと疑うほどの様々な専門的な知識
お互いの体調のことなど忘れ、一晩中語り明かしたことだってあった。

楽しかったのだ。

なんとなくだが、そんな彼女に最近避けられているという自覚は、俺の中でストレスになっていたのだろうか。

急にクラッと来て熱を測り、今のような状態となったのは昨晚急にだった。

「・・・謝らなきゃなあ・・・」

手を伸ばし、携帯を手取る。

もうすでに日が傾きつつあった。

やけに暗い部屋で開く携帯のディスプレイに、思わず目を背ける。

『迷惑ばかりかけてごめん』

と、たった一文を彼女の携帯に送信した。

ここ最近自分の携帯の発信記録、受信記録、メールボックスはほとんど彼女の名前で一杯だ。

そこにたまに混じって来るのが「毛利 蘭」の文字。

最後の発信記録は三日前。

課題がなんだったかを確か聞いただけの記憶がある。

自分にとっての幼馴染の彼女の存在は、そんなものだっただろうか。

少なくとも、今は――

携帯が鳴る。

もう返信が来たか。

携帯を開き、メールボックスを開けて、愕然とした。

「エラー・・・」

ようするに向こうが受信拒否、または電源を切っているのだ。

そこまで避けられているという事実と、どうしてそうなったのか、という疑問が交差する。

ああ、なんかもう。

「どうでもいいや・・・」

また熱が上がったのだろうか、意識がどんどん遠くなる。
遠のく意識の中で、視界がなんとなくぼやける。
泣いているんだろう、自分は。

彼女に避けられていることが悲しくて、それで。

俺は単純だから。

両手で顔を拭った。

寝れば忘れる。

起きたら、蘭にでも来てもらおう。

そう決意して、枕元の錠剤を一気に飲み干し、布団をかけ直した。

t w o (後書き)

無意識に志保さんはかなり依存気味な工藤氏は嫌いじゃないです。

原作の工藤氏は自分同年代ですけど友達になりたくないタイプです↑

二次創作の工藤氏は輝いて見えるのになぁ
| ^ ;

t h r e e

目を覚まし、時計を見て驚く。

夜中の2時だ。

さすがにこんな真夜中に蘭を呼び出すわけにはいかない。

でもなんとなく具合が悪いせいか、異常に孤独が嫌だった。

熱はまだ下がって無いだろう。頭がやけに重い。

代わりに着ていたものはすべて汗で濡れてしまっている。

面倒くさかったが、これ以上悪化させたくないので着替えることにした。

半身を起すと、枕元に置いてあった錠剤とポットが目に入った。

．．おかしい。

自分は確かに枕元の錠剤を飲んだはず。

なのに、どうして。

どうして、新しい錠剤が置かれているのだ。

ポットも、あまりの冷たさに表面のステンレスに水滴が付いていたはずなのに、それも拭かれていて、持ってみると中身も足されている。

誰かが来た？

蘭の姿が頭によぎった。

いや、彼女は来たら一声かけるはずだし、何より当然のごとく鍵をかけてあるこの家に彼女は入れないはずだ。

じゃあ、母さん？

．．彼女だったら尚更俺を放っておかないだろう。

大体そこに立っているだけでうるさい彼女に気付かないわけがない。

この家の鍵を持ち、なおかつそつと去っていく人間は、一人しかない。

「宮野．．．？」

どう考えたって彼女しかあり得ない。

あの時自分が投げた鍵は、確かまだ返されていない。

動けない自分を氣遣ったのか、彼女はおそらくこの家に鍵をかけて出たのだろう。

「．．．なんだよ、黙って．．．」

どついうわけかえらく綺麗なポットを眺めながら、それを嬉しいと思えなかった。

あんな態度を取っておきながら。

嬉しくもあるが、複雑だった。

考えても仕方ないので、服を取りに部屋を出た。

彼は気付いただろうか。

気付いてくれなくてもいい、そのために行ったわけではないのだから。

別に様子を見に行つてやるつもりは毛頭無かった。

ただ家に帰つて彼の家の鍵を持って帰つてきてしまったことを思い出した。

明日にでもこの町を出る人間が隣家の鍵を持っていくわけにもいかず、適当に理由を付けて、いや、寝ているなら無理に起こす必要もないだろう。

博士に合鍵を借りて鍵を返しに行くだけのつもりだった。

適当にリビングに置いておこうか、と思い真っ暗で月明かりに照らされたりリビングの机の上に鍵を置き、帰ろうとしたのだ。その時だった。

声が聞こえた気がした。

うめき声のような。

鼓動が早くなった。

もしかして、もしかして。

彼に何かあったら、彼女が。

走って2階の彼の部屋に飛び込んだ。

彼は寝ていた。

「・・・工藤君」

呼んでも返事は返ってこない。

それが寝ているためだということに気付くのに時間はかからなかった。

喉を触るとまだかなり熱かったので、熱くて声が出たのだろう。

「・・・まったく」

一気に脱力感が襲い、そのまま部屋を出ていこうとした。

ふと、枕元の錠剤のゴミと水滴まみれのポットが視界に入った。

放っておけない。

馬鹿みたい。

そう思いながらも、気付けばポットの水を捨て、家に錠剤を取りに帰り、彼の枕元にそれらを置いている自分が居た。

すべて、半無意識の状態だ。

「はあ、」

何やってんの、自嘲するようになため息がでた。
これで最後。

さようなら、と届かぬ呟きを寝息を立てる彼に発して部屋を出た。

いくらなんでも夜中の12時だ。

彼の家の玄関扉を静かに閉め、博士に借りた合鍵で鍵をかける。

今日は月が雲に隠れてしまっている。

暗く冷たいこの世界を照らしているのは一定の間隔で道端に立っている電信柱に付いた、小さな街灯。

思わず顔を両手で抑えた。

自分は泣いてる。どうしてか、泣いている。

手で抑えても、指の隙間を伝って彼の家の玄関先のコンクリートを濡らしてゆく。

「...ん」

両手で抑えきれないなら、と諦め、ポケットに手を突っ込んで踏み出す。

それでも、目から溢れる雫は止まらない。

今日は泣いてばかりだ。

夜中で良かった、と思った。

「馬鹿馬鹿しい」

口に出してそう言うのだ。

吹っ切れるように。

このまま帰ったら博士は驚いて自分を問い詰めるだろう。

面倒くさい。

少し遠回りしよう。

もうこの町に来ることもないのだから、最後に散歩してみるのも悪くないかもしれない。

歩きながら、頬を横に伝っていく涙は、そのうち気にならなくなつた。

t h r e e (後書き)

そつえば蘭ちゃん名前だけ。

f o u r

絶望の、裏返し。

次に目覚めた時には、すでに朝の黄色い陽の光がカーテンの隙間から射し込んでいた。

布団の中で思い切り体を捻る。体の筋が伸びていくような感覚。心地いい。

まだ熱は下がっていないのだろう、やっぱりまだ頭は重い。

でも寝る前に着替えた新しい寝巻は襟が少し汗で濡れているだけで、さほど自分が汗をかいていないことに気付く。

大分良くなったのだろうか。

なんか。

「腹減った」

呟いたってこの広い家には皮肉なことに自分しかない。

かといって食べられるような料理を作るほどの技量は自分には無い。

フライパンを捨てるくらいなら誰かに・・・蘭に頼んだ方が賢明だと思った。

起きた時にすぐによぎったのは幼馴染の顔ではなく、隣家の彼女の顔だった。

すぐにそれを脳内で幼馴染の顔にすり替えた。

今は考えたくない。

自分が今こんなにも悩んでると言うのに、彼女は自分のことなどこれっぽっちも考えていないだろう。
ずっと勘違いしていたのは自分だったのだ。

彼女はいつも自分のことを考えてくれていると。

子供の姿の時はA P T X被験者である自分を第一に考え、元の姿に戻れば経過の観察。

常に彼女が一番は自分だと思っていたのだ。

それが妙に心地よかった。

昨晚もそうだ。寝ている間にこっそりと。

新聞を取りに玄関に行き、リビングのソファに腰を降ろして気付いたのだ。

机の上に置かれた家の鍵を見て。

彼女は自分のために来たんじゃない、鍵を返しに来たついでに自分の部屋を覗いたのだ。

それでも、彼女が自分の様子を見てくれたことに変わりはないのに。机の上に転がる鍵を見つめる。

ああ、なんか。

『恋、してるみたいじゃねえか』

馬鹿だ。

自分も彼女も。

確かに勘違いをした。

あの別荘で、もしかしたら自分は彼女のことが、と。
それを違うと否定したのも自分だ。

馬鹿だ。

大馬鹿だ。

（あー分かんねえよ）

携帯を開いて、履歴から蘭の携帯へ発信する。
何を深く考えているのだ。

「・・・話し中」

携帯に嫌われているのかなんなのか、昨日のメールのエラーにしろ、
なんだか携帯を叩きつけてやりたい衝動に駆られる。

直後、聴きなれた着信音が鳴る。
ディスプレイに隣家の発明家の携帯番号。

「・・・もしもし？」

「おお、新一君。風邪は大丈夫かの」

「・・・熱は大分ひいたみたいだけどよ、まだなんか体がだるくて」

「じゃあ残念じゃが見送りにには行けないかの」

「・・・へ？」

間抜けな声が漏れる。

「ほら、志保くんが今日出発じゃろう。君も見送りに誘おうと・・・」

「

そこまで言ったところで、電話はいきなり切れた。
しばらく宙を見つめて、覚醒する。
出発、見送り。

気付けばジャケットを持って家を飛び出していた。

この日のために博士が買ってくれたボストンバッグを触りながら、なんだかんだ1年間過ごした部屋を眺める。

博士はここを実家だと思って、いつでも帰って来なさいと言った。これまでの人生の大半を組織の一部屋で過ごした私には、「実家」というものがどういうものなのかさえ分からない。けど。

きっとそこを去る時はこういう気持ちになるんだろう、ということは今分かった気がするのだ。

「いろいろ忙しくなるから、最初の3カ月は帰ってこれないとは思うけど、その後は必ず1週間に1回は帰ってくるから。心配しないで、その代わり」

一気に言葉を放って、間を置く。

「・・・食べ物には気をつけるのよ?」

「わ、分かっておるって」

「献立表、書いておいたから」

「——志保くんもまめじゃのう・・・給食じゃないのだから・・・」

1週間近く時間をかけて手書きで作った献立表を博士の前でひらひらさせる。

もちろん、調理法も。

「・・・じゃ、行くとするかの」

苦笑いを続けながら博士は腰を上げ、ビートルのキーを持ち出す。ボストンを引っ張って、外に出る。

隣には、見慣れた大きな屋敷があった。

昨晚泣きはらしたのは一生の秘密。

二度と、は言いすぎかもしれないが彼とはもう会うことはないだろう。

『さよなら』

今までありがとう。

責めたりしてごめんなさい。

お姉ちゃんが死んだのはあなたのせいじゃない。

蘭さんを泣かせないようにね？

時々あなたのことは思い出すかも。

いろいろ言いたいことはあっても、それは言葉に出すわけにはいかない。

ため息をひとつついて、ビートルに乗り込んだ。

元の自分の体は、旧規格のビートルに乗るときには少し窮屈だったりする。

と、運転席の博士が携帯電話を片手に誰かと話していた。

「．．．いち君。風邪は大丈夫かの」

．．．駄目。

それは駄目。

「君も見送りに誘おうかと．．．」

博士から携帯をひったくって、急いで電話を切る。

「．．．し、志保くん？」

「博士、お願い。彼には絶対教えてはいけないの。このことは」

彼には守るべきものがあるの。

そして、私にも。

「恋心」を封じ込めた、扉の鍵を、私は守らなきゃいけないの。

f i v e

「博士、余計なことしないでよ」

「．．．志保くん、聞いてくれんかのう」

「何」

車のエンジンをかけようとせず、博士はただ前を見つめた。

「君が新一君を避ける気持ちも分かる。きっと君なりに彼に迷惑をかけまいと、そしてどう別れていいのか分からないのもあるんじゃないろう？」

「．．．」

「しかしのう、何も言わずに出て行くのはあまりにも薄情と言っか．
．．いや、確かに志保君のお陰で彼も元に戻ることが出来たんじゃない。
志保君に全く落ち度は無いがしかし．．君も彼に組織壊滅を手伝ってもらったうえ、時には君も命を救ってもらったじゃろう。エレナさんの残したテープを探し出したのも彼じゃろう」

志保はボストンバックの中に綺麗に梱包して入れてあるテープを思い浮かべる。

「命乞いをした覚えはないかもしれない。テープを探してくれ、と頼んだ覚えもないかもしれない。元はと言えば君と彼が出逢ったのも彼の軽い興味本意からじゃ。君はそう思うかもしれない」

「．．．じゃがな、新一君はそういう人間じゃよ。困ってる人、泣いてる人、傷ついた人、命を失ってしまった人．．．孤独な人、そういう人間を見るといても立っても居られんのじゃ」

志保は諦めたようにバックから買い換えたばかりのスマートフォンを取り出し、すでに電話帳に登録してある新一の名前を探す。

「．．．最後に一言くらい言っても、いや言った方がいいとわしは思うよ」

観念。分かったから。

志保はため息をついて発信した。

と、その時。

突然ビートルのガラスを叩く音がした。

「．．．工藤君!？」

「そつら来たじゃろう」

博士は途端に笑顔になった。

「行つてきなさい」

志保は諦めたようにビートルのドアを開けた。

「．．送っていく必要が無くなるかもしれんのう」

一人になった車内で博士は呟いた。

「何

」．．．．．」

鳥のさえずりだけが聴こえる。

「何も無いなら、わざわざ人を車から降ろさないでよ」

「・・・どうして」

「え？」

「どうして、俺に黙って出ていこうとしたんだよ」

その声は、迫力があるわけでも鬼気迫ってるわけでもなく、ただただ、冷たく暗い低いトーンで響いた。

それこそ、志保が泣きそうになるくらいに。

工藤新一が、犯人を追いつめた時の声。

「言う必要なかったもの」

「は？」

「確かに何も言わずに出て行こうとしたことは謝るわ。ちょっとあまりに薄情すぎるかもしれないわね」

博士の言葉を復唱するように、志保は言い放った。

「・・・じゃあ、改めて言うわ。私は今日でこの家もこの街も出て、新しい生活を送ることにしてるの。それは投げ出すことも、取り消すこともできない」

言い終わると、新一に抱きしめられたのは、ほぼ同時だった。

慌てて押し返そうとして、それに抵抗するように新一はそれ以上の力で志保を抱き寄せた。

「・・・ちよつと、」

「気付いたんだ」

「え？」

「・・・お前が居ないと、何もできない自分に。飯だって、昨日みたいに具合が悪いときだって、一人じゃ俺は何もできない」

「そんなこと、蘭さんに」

「蘭は違う。そんなこと、させられない」

その程度か。志保は思った。

そこまで幼馴染が大事な、と。
軽い絶望感を感じた。

「何がどう違うの」

「・・・分かってたら苦労しないんだけど。だけど、俺の中で何か
がそうさせてんだよ。お前じゃないとだめだ、絶対に、って」

まあ、確かにあなたは理性の人じゃないわよね。
そんなことがよぎった。

もちろん、新一の腕の中で。

「私は、あなたの代わりならいくらでもいるわ」

「は？」

「どうせ同情してるつもりなんでしようけど．．．言うておくけどね、私この街に対して愛着とか執着があるわけでもないし、情で引き留めようつたって無駄よ？」

大体なんであなたが私を引き留めるんだか。

「．．．それ本気で言ってるの？」

「今回ばかりは冗談じゃないわね」

「へえ」

それから、急に新一は何も言わなくなった。
やっと諦めてくれたか、勘弁してくれ。

志保がそう思い腕を離れようとしたときに、志保は気付いた。

「——なんで泣いてるのよ」

「．．．俺が聞きてえよ、なんで分かってくれないんだよっ！」

「え？」

「そりゃあ、確かにお前のこと飯炊きババアとか洗濯ババアみたい

に扱ったかもしれないけどよ、だってそれが当たり前みたいになつてて．．．でも昨日みたいになんだかんだ言いながら俺のこと心配してくれてたお前のこと見てて．．．なんつーか、お前が居ないと俺が．．．なんつーか――」

泣いて小さい子が母親にねだるように、新一は志保の肩を掴んで怒鳴った。

博士が何事かとビートルの窓を覗きこんで確認する。

「とにかく、好きだ、お前のことが！愛してる！」

言い切ると新一は志保にどつと倒れこんだ。

志保が新一の名を呼ぶ声だけが響いた。

f i v e (後書き)

新一君女々しいかな(。!<
次回最終回。

S i X (前書き)

完結。

新一は約39度もの熱を出していた。

呆れたように志保はため息をつく、新一の額のタオルを手に取り、脇の洗面器で絞る。

3時間ずっとその繰り返し。

本当なら今頃新幹線の車内で昼食を摂っている時間だ。
わざわざ切符代を出してくれた博士に申し訳ない。

というより、問題なのはそれじゃなくて、どうして自分が情に負けて新一の看病をわざわざしているのか、志保にはどうしても分からなかった。

高熱の出た病人のうわごとを信じてる自分が馬鹿らしかった。

「愛してる、ってねえ・・・」

嘘でも。

「あんな大きな声で言うこと無いじゃない」

幻でも。

それで良い。

そのうち起きて、そんなの覚えていない、と言っただろうから、そしてたら乗り損ねた新幹線の交通費を出してもらおう。それでいい。

決め込んで、志保は立ちあがろうとした。
その時。

「・・・工藤君？」

弱弱しい有り余った力を、やっと振り絞って、新一は志保の手を捕まえる。

「みや、の」

そう言っつて半身を起そうとする新一を、強引に志保は押し戻した。

「寝てなさい、ちょっと危険な状態だから」

「え？」

「解毒剤の副作用がね、ちょっと。ここまでとは予想外だったから」

志保は小さく溢した。

「・・・危険な状態？」

「ええ、大体あまりに高熱になれば人間は死ぬわ。普通の人間は免疫とか抵抗力があるからそこまで上がらないようになってるけど、私たちの場合は風邪でも命取りなんだから」

「・・・俺死ぬの？」

志保は少し目を見開いて、新一を見た。
捨てられた子犬のような顔をした新一の瞳がこちらを見ていた。

「いいえ。とりあえず私の作った風邪薬を飲んでおけば、普通の人間より治りは少し遅いけどそのうち良くなるわ」

例えば、ここで蘭さんに連絡すれば。

そんなことを志保は考えていた。

風邪薬はあるし、基本的に栄養のバランスが取れていれば食事もな
んだって良い。

さあ、早く交通費を請求して。

彼のことは蘭さんに任せて。

新しい生活が待ってる

そんなことを考えてる自分が、志保はとても情けなく思った。

「とりあえず、」

「蘭さんに連絡するわ」

携帯を取り出した志保は手を止めた。

「・・・お前がいい」

「は？」

「お前がいい、というよりお前じゃなきゃ嫌だ」

「我儘言わないで、私だって」

「・・・新しい生活がなんだよ。そんなにさ、俺のこと嫌い？」
嫌いだ。

口に出して言ってしまうば、終わらせられるのに。

「嫌いじゃないわ」

「じゃあ、」

「好きでもないわ」

あなたなんかいなくなっただって平気。
執着なんかない。

「俺は好きだよ、お前のこと」

「・・・熱で頭おかしくなった？」

「なんだよ、それ」

「ねえ、目見えてる？私は宮野志保。蘭さんじゃないわ」

大袈裟に志保は新一の目の前で手を振った。

その手を、新一は力強く掴んだ。

「見えてるさ。ちゃんと分かってる。お前が宮野志保だって」

何を。

今更。

「
——
離して」

「行くな」

「何」

「ずっとここにいろ」

機械みたいに、反響して。

「馬鹿なこと言わないで」

「馬鹿だから仕方ねえな」

「あなた性格悪いわ」

「今更？」

——そう、今更。

今更そんなこと言われても断る。

「相棒居なくなったら困る？」

「そういつわけじゃねえよ」

「じゃあ」

思い切り引き寄せられたのは志保。

「こづいこづいと」

「……………」

私は、

どうすればいい？

「どづいつ意味よ」

「さっき言ったはずだろ？好きだ、って。愛してる、って」

だから、

愛してるって。

「本当に？」

「嘘はつかねえよ」

誰か、教えて。

俺はこれでいいんだろうか。

- - - - - これでいい。

愛じゃなくなつて、哀だと思つてた。

彼が私を見る目。

きっと同情してるんだ。

『可哀そうに』とか、そういう言葉が一番嫌いだったのに。

「・・・なんで泣くの」

「へっ?」

ぼろぼろと大粒の涙が零れる。

どうして、どうして。

これが夢なら。

「どうして私が泣かなきゃ」

「・・・それはお前が俺のこと好きだから」

「どれだけナルシストなのよ」

「へへん」

ごめん、蘭。

心の中で新一は蘭に必死に謝っていた。

「蘭がいけなかったわけじゃねえさ。今でも好きだし。でもお前はそれ以上なんだ」

「そんな恥ずかしいことよく言えるわね」

「ほら、俺ってキザだし」

「自覚あんのね」

「・・・でも無理だわ」

「え？」

「私はここを出ていかなきゃいけないわ」

「どうしてだよっ!!」

「お願い、分かって。いつまでも・・・博士に迷惑をかけたくないの。ちゃんと自立して、安心させてあげないと」

ぷっ

新一は吹き出した。

「何がおかしいのよ」

「お前ら本当の親子みたいだな」

「・・・え」

穏やかな風が、窓の隙間から流れてきていた。

「いてえ・・・」

ホームに止まった新幹線から、一人の男が降りたつた。

「なんで2時間も座ってなきゃ・・・」

肩をたたきながら、あたりを見回す。
そして、後ろを振り返る。

「・・・おい、博士」

「すまんのう、どこで降りるのか分からなくて」

—— 出入り口なんか決まってるだろ・・・

「アイシどこにいの？」

「さあ、駅に迎えに来てると言っておったが・・・」

「居た」

ほら、走って。
抱きしめて。

そんな恥ずかしいことしない。

家に帰ってからの楽しみ。

「志保くん！」

ゆつくりと、改札に向かって歩き出す。

近づく、愛しい人。

S i x (後書き)

完結です。

蘭ちゃん一回も出てこなかったね。まあ、そんな時もあるよね。

本当はどうして工藤氏が蘭ちゃんじゃなく志保ちゃん選んだのか深く書きたかったんですけども。まあ、そこはご勘弁。

とりあえず「Love is Gone」、終了です。他作品もよろしくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9140r/>

Love is Gone

2011年7月10日01時34分発行